二〇二三年

入学試験問題

国語

一、試験開始までこの問題冊子の中を見てはいけません。
二、この問題の試験時間は六十分間です。解答はすべて解答用紙（マークシート）にマークしてください。
三、問題と解答は、声を出して読んではいけません。
四、印刷がはっきりしない場合のほかは、問題についての質問は受けません。
五、終了の合図で、すぐ筆記用具を置いて答えの記入をやめてください。
六、この問題冊子は回収するので、持ち帰らないでください。
七、試験中は、監督者の指示に従ってください。
八、不正行為があった場合は、解答をすべて無効とします。

（問題文には、出題の必要に応じて変更を加えた部分があります。）

2032

1　次の文章を読んで、後の問い（解答番号 1 ～ 7 ）に答えよ。

日本では「データは資源」ということが言われ、民間にビジネス資源という意識が高まってしまった。言い方は悪いかもしれないが、局所的にしかものを見ない経営者が出てきて、事業者がデータを囲い込み始める傾向がでてきたように思える。世界的にＩＣＴ(注1)は「オープン」に向かっているのに、日本ではデータを囲い込むというのは、明らかな逆行だろう。

「データは資源」という言葉は、データの「精製方法」次第で、宝にもゴミにもなるという意味でもある。例えば原油も精製しなければ、臭くて汚いだけのヘドロのようなものだ。 A 、原油が流出すれば環境に多大の被害を与えるように、生データも下手に流出すれば大問題になる。

ここで精製とは「データ・クレンジング」――データをきれいにする処理を意味する。例えば公開目的なら、個人を特定できる項目を消去し匿名化するなどだ。また、一般への公開目的でなく、日々の運用に伴い目的意識なく単に記録できるから溜(た)めてあるような生データは、項目が途中で増えたりなくなったり、分類方針がいつの間にか変わったりする。データの単位がいつの間にか変わったり、測定範囲が変わったり、コラム(注2)がずれたり――我々の言葉で言う「正規化」がなされていない「汚い」データは、そのままでは統計処理にもＡＩの学習にも使えないことが多い。

B 、データをきれいにして、正規化する「データ・クレンジング」を行うのだが、大量のデータの場合は手作業で行うのは非現実的で、原油の「精製装置」のように、正規化のためのプログラムを作って処理する。このプログラムは、データの「汚れ」の性質に合わせて作る必要があり、それにはデータ自体に対する深い理解とプログラミング能力が必要となる。

C 、システム開発業者に丸投げできず、現場では日々の業務に追われ余力がないということで、結果としてデータを使う能力のない事業者がデータを囲い込み、「汚い」ままで持ち腐れとなりつつある。

(1)民間事業者が持つ腐れデータを、いかに「資源化」するか。民間データでは、税金で作られたデータでない以上、「無料」という意味の「オープン」を強制することはできない。しかし「クローズで持ち腐れ」――いわゆる「塩漬け」を回避し、社

会に還流させて新たな経済成長に資するという意味での有料も含めた「オープン」は可能だ。

考えられるのは、市場経済原理で適切にデータを取引できるデータマーケットを確立することだろう。経営資源――アセットが「塩漬け」にならず、適切に流通することを促すのが「アセットマネジメント」であり、その「流動性確保」のために必要なのが市場の確立だ。

一般的にアセットマネジメントとは、不動産などのアセット（資産）の「証券化」を行い、それにより不動産取引を証券市場メカニズムに持ち込むのを可能にすることに使われているが、これをデータの活性化にも使えないか、というのが私の考え方だ。

相対（あいたい）での個別取引のみの場合、データの取扱ライセンス規定やフォーマット調整（注3）などが複雑で、データ提供者も利用者も個別に契約していては、手間が幾何級数的にかかって非現実的となる。そのため市場化することにより、取引を「正規化」して流動性を確保するのだ。

データを市場にするなら、証券取引所や豊洲（とよす）の卸売市場のように非営利で中立的な組織の監督下で設備やルールを制定し、皆が安心して取引できるような環境整備が望ましい。無料のデータも有料データもワンストップで入手できるようにすれば、大手から中小、ベンチャーまで、ＡＩとデータを活（い）かした新ビジネスがどんどん始められるプラットホーム（注4）となる。オープンにすることでデータもできるだけ多くの人が「精製方法」を試しチャレンジできるようになる。その上で、オープンデータで得られた成果もまた、有償無償は問わないが、とにかくオープンにするべしといった制度設計にすれば、成果を社会に還元できる――そういう積極的な「オープン」のエコシステムを形成するべきなのだ。そしてこの考え方で作られたのがＯＤＰＴ（注5）である。

民間データの資源化よりさらにナイーブ（注6）なのが、個人データの資源化であろう。この分野では残念ながら、日本の行政は失敗の連続である。経産省主導で制度化が進められたという「個人情報保護法」の本来の意図は、著作権法や特許法のように、それまでなかった個人データという概念を確立し、個人データの扱いをルール化することで、むしろ個人データの利用を促進

しようとする意図だったと思われる。

しかしこれもアプローチを間違えたためか、逆に「個人情報は極力秘密にすべき」という新たな意識を広めるだけの結果になってしまった。日本では、個人情報保護法の成立以前は名前と住所の載った電話帳が各戸に配られていたのだから、

D

。

「データは資源」の認識が「塩漬け」を生んだのと同じように、個人情報保護法は「個人情報はそんな大事なものだったのか」という意識を高め、その結果、活用できずにお蔵入りが進んでしまう。実際、東日本大震災のときに、個人情報保護法の垣根のため、要介護避難者の情報を自治体から救助組織に渡すことができず、多くの方が亡くなられた。

そういった問題指摘があり法改正が行われたが、適切に解決できておらず、いまだ医療の現場では転院後の治療や病状の記録が追えないなど、個人情報保護法による制約が問題になっている。

マイナンバーも、本来は紙書類で行う行政処理において個人の特定に使う「名前と住所の組み合わせ」と同じ個人特定のためのもので「名前＋住所＋α」程度の意味合いしかないものだ。しかも、マイナンバーを見ても名前も住所もわからないので「名前＋住所＋α」を書いてきたような書類なら、同じ気軽さで使ってもいいはずのものだった。

それが、２００２年の「住民票コード」で国が説明に失敗し「牛は10桁（けた）、人は11桁」といった感情的言説が広まり、セキュリティ問題や制度不備も相まって大きな反対運動が起こった。その結果、個人情報保護法の特定個人情報規定やマイナンバー法で厳重な管理が求められ、マイナンバーは「パスワード」のように、極力秘密にしまっておくものというイメージを多くの人に植え付けてしまった。

あのプライバシーにうるさい欧州でも、国民番号はコンピュータ導入の当初より使われており、「パスワード」の「ようなもの」と思っている人はいない。だから「マイナンバー制度対策金庫」とか、「マイナンバー取得・管理キット」とか、「マイナンバー収集代行」とか、関連ビジネスが盛り上がり、個人データの適切な活用ができない日本の現状は、今後のＡＩ＋ビッグデータの時代に大きな足かせとなるに違いない。

現行のマイナンバー関連法は、許されるサービスを列挙した[(2)]ポジティブリスト型の法律であるため、元の個人が許可しても利用不可能だ。これを法改正して、英米法的なスタイルの「やってはいけないこと」だけを列挙した[(3)]ネガティブリスト方式にするのが理想だ。違法利用の定義と罰則を規定し、法益[(注7)]のバランスは裁判で加味する刑法型の法体系なら、それも可能のはずだ。

そして、これら制度設計以前の問題として何より重要なのは、「データは隠すものでなく、社会のために積極的に使うもの」として皆の認識を変えていくことだ。

ヘルスデータがクラウドに蓄積される時代、救急のために時間に余裕のない状況で、医療関係者ならプライベートデータにアクセスできるようにするといった制度を作るには、「ただ守れ」というだけでない「プライバシー」と「パブリック（公共）」のバランスの哲学が重要になる。今、最も伸びる分野として期待されている「ヘルスケア」も、個人情報保護法のために病院現場が萎縮し、日本では展望が開けない状況になっている。

オープンデータを使った新しい社会を実現するには、個人データをどう扱うかということについての制度の明確化が必要だ。クラウドサービスやＳＮＳが広まる現在、サービスを受けるには、個人情報をサービス提供側に渡すことは不可避なことという認識が広まり――個人が個人情報を出さないというのは非現実的になってきた。

そのため、個人情報を受けた（受け取ってしまった）側が、状況に応じてその個人に不利益にならないように、その情報を適切に扱わなければならないという「事業者側の義務」として「プライバシー」を定義しなおすことが、必要になっているのではないだろうか。

それが[(4)]本来の個人情報保護法の考え方だったはずだが、その背景にある哲学を説明し、真摯に皆の理解を得る努力をせずに、法律のみを成立させた結果が、現在の人々の意識のズレに繋がってしまったのだと思う。

例えば、東日本大震災でホンダがカーナビデータを吸い上げて集計し、グーグルと協力してマップに反映するというようなことをした。それにより、どの道が通れるのかなどが明示され、援助や復旧計画に非常に有用だった。

しかし、これは非常時だからこそ大きな問題にならなかったが、旧来的なプライバシーの概念からすると問題が出る案件だ。カーナビデータの本来の利用目的としてこのようなケースは想定されておらず、これについての個人の事前許可を受けてはいなかった。実際、通行規制をすり抜けて通ってはいけない道を通っている一般車両の存在が明示化され、平時であれば道路交通法違反者として問題になってもおかしくない。

個人情報を受けた（受け取ってしまった）側が、状況に応じて個人の法益に反しないように適切に扱うという、「事業者側の義務」としてプライバシーを再定義すれば、このケースは利用した意図の「正当性」の問題となり、震災時ということを考えれば十分認められる範囲となる。

ここで重要なのは意図の「正当性」の公的な事後評価のための制度設計だろう。裁判所で審査し、意図が認めがたいものということになれば、事業者には罰則を与える——事後的な抑止力[(5)]によりプライバシーの濫用を防ぐという制度設計である。

例えば、個人情報を利用した商品リコメンドと、それをスパムメール業者に売り渡すことのあいだには、様々な濃度のグレーゾーンが存在し、それを判定することは機械的処理では難しいだろう。そのため人間系の判断機構がぜひ必要になる。

現行のような「やっていいこと」だけが書いてあるポジティブリスト型の許認可制度体系では、技術進歩の激しい現代において、イノベーティブなネットサービスの迅速な提供は不可能だ。

一方、それと表裏一体の関係として、ネット時代の「パブリック」——つまり、個人の社会的責任も見直しが必要だろう。例えば個人の行動履歴は、パンデミック時に限ってそのデータ利用ができれば、多くの人の命を救うための、非常に有用なデータとなる。

ネットワーク時代には、公共のために状況に応じて個人情報を提供するという社会的「責任」——さらに一歩進んで、例えば「がんの治療法の進展に使ってほしい」というような、自分のデータを社会のために使ってもらう「権利」があるということまでが、「パブリック」の概念となる。これはまさに、個人情報を受け取ってしまった側の、適切な利用「義務」というプライバシーの概念と対になって、初めて成立するのである。

（坂村健『ＤＸとは何か』より）

（注1）ＩＣＴ＝情報通信技術。
（注2）コラム＝ここでは、データを表などに整理したときの項目の列のこと。
（注3）フォーマット調整＝コンピュータの記憶媒体に記載される配列や形式を調整すること。
（注4）プラットホーム＝コンピュータを作動させる際の基本的な環境やその設定のこと。
（注5）ＯＤＰＴ＝公共交通オープンデータ協議会。
（注6）ナイーブ＝単純で未成熟なさま。
（注7）法益＝法律によって保護される利益。

問1 空欄 A ～ C に入る表現の組み合わせとして最も適切なものを、①～④の中から一つ選べ。解答番号は 1 。

① A つまり　B とはいえ　C あるいは
② A しかも　B そこで　C そのため
③ A だが　B したがって　C というのも
④ A そのうえ　B それとともに　C ところが

問2 傍線部(1)について、(ⅰ)(ⅱ)の問いに答えよ。

(ⅰ)「民間事業者が持つ腐れデータを、いかに『資源化』するか」とあるが、筆者はどのような方策をとるのがよいと考えているか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は [2]。

① 事業者が溜め込んでいる生データを、非営利的で中立的な組織の監督下で多くの人の手を借りて精製し、その後に市場で流通させることで、誰もがワンストップでデータを利用できるようにすること。

② 事業者のデータ囲い込みを禁止するルールを整備し、データを正規化するプログラムによって事業者に環境整備をさせたのち、非営利的で中立的な組織の監督下でデータを市場に流通させていくこと。

③ 非営利的で中立的な組織の監督下でデータを市場に流通させ、だれもが必要なデータを利用できる環境を整備すると同時に、その結果得られた成果もオープンにして皆が活用できるようにしていくこと。

④ 非営利的で中立的な組織の監督下で、だれもがデータを無料で利用できるような市場の環境整備を行い、その代わりにオープンデータから得られた成果のオープン化も義務付けるようにしていくこと。

(ⅱ) 筆者は、「資源化」することにどのような意義を見いだしているか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は [3]。

① データ提供者と利用者の契約が簡略化され、データを早くオープン化できるようになること。

② 生データの精製が促進されることで、「汚い」データの流出による被害のリスクが低減すること。

③ データの取引に市場経済原理が導入されることで、皆が安心して取引できるようになること。

④ 「塩漬け」になっているデータを社会に還流させることで、新たな経済成長が期待できること。

問3 空欄 D に入る表現として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 4 。

① こうした意識の普及は大きな進歩である

② これは実に適切な対応であった

③ これは明らかに行きすぎだ

④ いま考えるとおそろしい

問4 傍線部(2)「ポジティブリスト型」、傍線部(3)「ネガティブリスト方式」とあるが、両者を、個人情報をめぐる制度の観点から筆者はどのように評価しているか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 5 。

① 「ポジティブリスト型」では、利用可能なサービスが列挙されているにすぎないため、データが悪用されかねないが、「ネガティブリスト方式」では、禁止事項と罰則が刑法型の法体系によって定められているため、より安全にデータを活用することができる。

② 「ポジティブリスト型」では、利用可能なサービスが限られているため、セキュリティ問題や制度不備が生じてもすぐに対処できるが、「ネガティブリスト方式」では、法に違反しなければ自由にデータを利用できるので、対処が必要な問題が増えることが見込まれる。

③ 「ポジティブリスト型」では、元の個人の意思に基づいて利用可能なサービスが決定されてしまっているのに対し、「ネガティブリスト方式」では、法的に禁止されていること以外であれば元の個人の意思に縛られることなくデータを利用することができる。

④ 「ポジティブリスト型」では、利用可能なサービスがあらかじめ決定されているため、データの利用範囲が限定されるのに対し、「ネガティブリスト方式」では、禁止事項が列挙されているだけなので、法体系の範囲内であればデータの利用が可能である。

問5 傍線部(4)「本来の個人情報保護法の考え方」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 6 。

① 提供された個人情報を個人に不利益にならない仕方で利用するよう事業者に義務付けることによって、公共サービスを通じて個人が得られる法益を守る考え方。

② 個人に個人情報を注意深く管理することを求めるだけでなく、公共のために情報を提供してもらい、事業者にはその情報を公共に役立てる義務を負わせる考え方。

③ 状況に応じて個人の法益に反しないように適切に情報を扱うことを事業者の義務とすることによって、個人データを公共の利益のために役立てていく考え方。

④ 個人情報を公共のために利用する際に、プライバシーを状況に応じてその都度定義しなおす義務を事業者に課すことで、公共の利益と個人の利益の両立をはかる考え方。

問6 傍線部(5)「事後的な抑止力」とあるが、ここでは具体的にどのようなことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 7 。

① 個人情報を災害などの緊急時に利用する際の禁止事項と罰則を定め、利用後に裁判所が適法か否かを審査する制度を設けることで、事業者に違法な利用を思い止まらせるようにすること。

② 個人情報の利用の意図を裁判所が審査した後でのみ利用を認める制度をつくり、違反した事業者には罰則を科すことで、個人の法益に反する利用がされにくくすること。

③ 個人情報が利用された後で、裁判所が利用の意図に正当性がないと判断した場合は処罰する仕組みにすることで、不当な利用をしないよう事業者自身が慎重になるようにさせること。

④ 個人情報の不正な利用に対する罰則を制定することで、利用の意図が正当ではないと裁判所が判断した場合に、事業者にその利用の中止を強制できるようにすること。

2

次の文章を読んで、後の問い（解答番号 8 ～ 13 ）に答えよ。

17世紀に近代の大きな物語が唱えられ、18世紀に産業革命が起きたことによって、人類は飛躍的に豊かになった。産業革命は化石燃料活用による物理的パワーをもたらしてくれ、人々を肉体的労働から解放してくれた。様々な財の生産量が飛躍的に増えたことによって世の中は見違えるほど豊かになった。産業革命後の200年間で世界の人口は3.5倍になり、寿命は2倍に伸びたし、何より余暇やレジャーを楽しむ余裕もできた。現在のほとんどの人々は中世の貴族以上の生活水準を享受している。

そして今、(1)圧倒的な情報処理パワーをもたらしてくれるＡＩ革命が勃興しつつある。ＡＩが実用化されると、人間は多くの知的作業から解放される。データ集計や単純な情報整理だけでなく、高度な知的業務と言われている金融やプログラム設計のような領域までＡＩがこなせるようになって来ている。ＡＩによる飛躍的な生産性の向上に加えて、産出された財貨の再分配の仕組みが確立されれば人類は生きるための労働から解放され、新しい歴史のステージに進むことができるのだ。

それでは、産業革命がもたらしてくれた肉体労働からの解放と、ＡＩ革命がもたらしてくれるであろう知的労働からの解放によって、人類はどのような生活と人生を手に入れることができるのか。またそうした新しい時代を導くための現代の大きな物語とはどのような価値観と方法論で描かれるのか。人間の幸福の原点に立ち返って考えてみたい。

現代の大きな物語を考える上でまず認識しておくべきなのが、こうしたテクノロジーの進展によって人類は生きるための労働から解放され得るということである。産業革命によって無限の物理的エネルギーを獲得したことによって、高層ビルを建てたり、巨大タンカーで大量の物資を運んだり、日本とアメリカの間を10時間のフライトで移動できるようになった。生産性、効率性という観点では少なくとも100倍以上、あるいは無限大に向上したわけである。

それと同様に、これからＡＩが発達しどんどん経済活動に利用されるようになると、大半の情報処理業務の生産性は少なくとも100倍とか数千倍、数万倍になる。言い換えれば、それまで100人でやっていた仕事がたった1人でできるようになるということだ。証券会社では600人でやっていた株式のトレーディング業務にＡＩを導入することによってたった2人で業務を遂行できるようになったというような事例も既に多々出て来ている。

このように人間が肉体労働からも知的労働からも解放されると、言い換えるなら現在人々が消費している財やサービスのほとんどをロボットとＡＩが人間に代わって生産してくれるようになり、そして合理的な再分配の仕組みが整えられれば、人間はほとんど働かなくても現行の生活水準は享受できるようになる。ＡＩをいかに実用化していくかとか、ＡＩの活用によって産出された財・サービスを再分配するための制度をどのようにして実現するかといった課題はあるものの、ＡＩが持つ圧倒的な生産力向上のポテンシャルはそうした現実的課題を乗り越えていけるだけの必然性を持つ。それらの課題が解決されて、人々が働かなくても生活できるような状況になった時、人間はどうすればより豊かに生活し、より幸福な人生を送ることができるのかを描き出すことが、これからの時代の大きな物語の核心となるだろう。

人間の営為を「目的」と「手段」に分けて、人間の幸福を探究したアリストテレスの教えが一つの参考になろう。人間の営為の大半は何らかの目的を達成するための手段として行われているが、アリストテレスはある営為を行うこと自体が何かのための手段ではなく究極の目的であるようなエウダイモニア（幸福の行為）があるとした。そして、エウダイモニアは真・善・美を生み出すことであると喝破した。真は真理の追究に関すること、善は人の為（ため）、世の為になる善行、美は美しいものの創作である。エウダイモニアとしての真善美は、儲（もう）けるために新しい発見をしようとか、選挙運動でアピールするために社会奉仕活動をしようとか、展覧会で賞を獲（と）るために大作の絵を描こうといった、［　A　］。その行為、その活動をすること自体によって、自己充足感や幸福感を得られるような究極の目的としての真善美である。

(2) 古代ギリシアにおいては、人々が生きるために必要な物資は奴隷労働によって生産されていた。市民は生きるための労働からは解放されていたのである。この点が、これからわれわれ現代人が享受し得るであろう生きるための労働から解放されるという大きな前提条件が共通していることになる。その意味で、アリストテレスが提起したエウダイモニアとしての真善美の追求こそ、労働から解放された人間を豊かに幸せにする営為であるという考えは大いに参考になると考えられる。

アリストテレスが提起したエウダイモニアの概念と真善美を追求する行為の価値は、その普遍性の故に暗い中世に明るい光を灯（とも）す役割を果たした。

教会への信頼が崩壊し、神の権威が揺らぎ始めていた中世の終盤14世紀に、イタリアではルネサンス運動が勃興した。ルネサンスは、知的活動や創作活動まで神の思し召しと神の摂理に制約されてきた反動として湧き起った、人間らしさを尊重・賛美した文芸・芸術の復興活動である。そのためルネサンスはキリスト教が世の中を一元的に支配する前のアリストテレスが生きた古代ギリシアに尊重された真善美を復興させようとする思想を持っていた。中世において絵画や彫刻は神や天使、あるいは聖書のシーンを描いたいわゆる宗教画しか許されなかったが、生身の人間を描いた作品が登場し、称賛された。ダ・ヴィンチが描いた商人の妻の肖像画「モナ・リザ」が代表作である。またラファエロは「アテナイの学堂」という作品でプラトンやアリストテレスといった古代ギリシアの哲学者・科学者を描いたが、これは古代ギリシアの真善美に対する敬意を表したものである。

このようにそれまでの宗教画にはなかった人間の活き活きとした姿をモチーフにした作品が次々に創作されるようになり、芸術の概念や社会における位置づけも変化した。そうした人間性を尊重した動きは絵画の分野だけでなく、様々な文芸・芸術の分野にも伝播して行った。人間の生々しい生活が書かれた小説が出され、メロディーや和音が豊かな音楽が登場し、文化・芸術の分野は中世時代とはうって変わって華やぎ、活況を呈した。

このルネサンス運動が示しているのは、神による支配と抑圧に対する［　B　］として人々が希求し回帰する対象は、必然的に人間性、人間らしさになるということである。この必然性をもって考えると、資本が神のごとく君臨し、全てが経済合理性で評価・判断されている現在も、人々が回帰すべきは、経済合理性から離れ、人間らしさや人間性に調和するものとなるであろう。そしてそれは、それを行うこと自体が喜びや尊厳を与えてくれるエウダイモニア的な真善美の性格を持つものとなるだろう。これから描かれるべき新しい大きな物語には(3)第二のルネサンス的な人間性を尊重した価値観が求められることになろう。現在、労働者としても消費者としても、両方の面で資本が儲けるための手段にされてしまっている人々が、これからの時代にまず求めるべきなのは人間らしさへの回帰である。

（波頭亮『文学部の逆襲』より）

問1 傍線部(1)「圧倒的な情報処理パワーをもたらしてくれるＡＩ革命が勃興しつつある」とあるが、それはどのような未来をもたらすと予想されるか。筆者の主張として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 8 。

① ＡＩ革命によって人々の生活水準が飛躍的に向上する一方で、これまでの人間の在り方が否定される可能性がある。

② 財の生産量を伸ばし豊かな生活を可能にした産業革命の時と同様に、ＡＩ革命の勃興により現代人は労働から解放されるが、そのことで結果的に生活水準が下がってしまう。

③ 産業革命が可能にした肉体労働からの解放に加えて、ＡＩ革命によって人類は知的労働からも自由になり、その結果、現代人は働かなくても生きていけるようになる。

④ ＡＩ革命は人間の生活水準を飛躍的に向上させ、さらに多くの人々が人間の幸福の原点である物質的な豊かさを享受して生きることを可能にする。

問2 空欄 A に入る表現として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 9 。

① 究極の目的のためには手段を選ばない行為である

② 自らの幸福を第一に考えた行為である

③ 身の丈に合わない壮大な目標を掲げることではない

④ 何かを得るための手段としての行為ではない

問3 傍線部(2)「古代ギリシアにおいては、人々が生きるために必要な物資は奴隷労働によって生産されていた」とあるが、筆者がこの話を取り上げた意図は何か。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 10 。

① アリストテレスが人間の幸福を探求した古代ギリシアとＡＩ革命を迎えようとしている現代には、自身に代わって労働を担うものが存在するという共通点があることを指摘し、エウダイモニアの追求が現代人のよりどころとなるという自らの主張に説得力を与えるため。

② 古代ギリシアにおけるエウダイモニアの追求が実際は市民階級にのみなし得た営みである点に着目し、現代においてもエウダイモニアの追求は限られた人々にのみ可能であり、人間全体を真の意味で豊かにする営為にはなり得ないことを強調するため。

③ 古代ギリシアの市民たちが豊かで幸せに生きることができたのは労働から解放されていたからであるという点に注目し、産業革命とＡＩ革命を経て労働から自由になりつつある現代人もまた働かなくてよいという幸福を手にするという自らの主張を支えるため。

④ 古代ギリシアでは幸福の追求のために奴隷労働を使って真善美を創出していたという負の側面にも目を向け、こうした過去の過ちを繰り返さないよう、現代のわたしたちはＡＩなどの技術を駆使することによって真善美を生み出す必要があると人々に注意喚起するため。

問4 空欄 B に入る表現として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 11 。

① アンチテーゼ

② トートロジー

③ ジレンマ

④ パラドクス

問5 傍線部(3)「第二のルネサンス的な人間性を尊重した価値観が求められることになろう」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 12 。

① あらゆる事柄が経済合理性に基づいて評価されるようになった現代では、宗教的権威に由来する価値観よりも人間性に調和する価値観のほうがより合理的であるとして重視されるようになったから。

② 特定の原理が社会を一元的に支配する点で現代社会と中世ヨーロッパ社会は共通しており、今後そうした支配への反動が生じた場合、わたしたちもまた中世末期の人々のように人間性への回帰を求めるようになると類推されるから。

③ 現代では全てが経済合理性で評価され人間らしさが失われつつあるが、そのなかで人間の活き活きした姿に焦点をあてた中世末期のルネサンスの文芸・芸術作品が今改めて評価されているから。

④ 神の権威が揺らいだときに人間らしさを取り戻そうとして真善美の復興運動が生じるという仮説に基づけば、現代人は神のごとく君臨する資本の支配から既に脱しており、今後、同様の復興運動に傾倒するのは必然であるから。

問6　本文の内容と合致するものとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 13 。

①　産業革命から現代まで続くテクノロジーの進展によって、多くの人々がエウダイモニアとしての真善美を追い求める活動に取り組むようになったが、その一方でルネサンス運動にみられた人間らしさを尊重・賛美する態度が現代の人々から奪われる契機にもなった。

②　今後ＡＩ革命が進むことによって人類はほとんど働かなくても現代と同じ生活水準を保ちつつ生きていけるようになるかもしれないが、ただしそのためには一部の人間だけが財やサービスを独占し社会格差が拡大するような事態を避けるための制度が必要である。

③　知的労働をＡＩに任せることによって人類は真善美の追求だけに時間を費やすことも可能になるだろうが、働かない生き方に人間本来の豊かさや幸福を求めることはできず、人間が人間らしく生きるにはエウダイモニアの追求と労働することの両立を図る必要がある。

④　ダ・ヴィンチ作「モナ・リザ」は宗教画ではなかったためルネサンス期には評価されなかったが、その後、行き過ぎた資本主義への反動として人々が人間らしさを希求し真善美に回帰するようになってから、生身の人間を描いた作品として称賛を受けるようになった。

3

次の文章を読んで、後の問い（解答番号 14 ～ 20 ）に答えよ。

後悔という人情の一片が、いかに倫理学に関わるのか、それは思ったよりも現代の人々の心に突き刺さっている。たとえば、ジョン・ロールズ（一九二一～二〇〇二）の『正義論』（一九七一年）は、人情とか後悔とは無縁の思想のように見える。ところが、そうではないのだ。彼の正義論は剣と秤（はかり）を持つ裁きのための理論ではない。ロールズもまたモラル・センティメントを大事にする。カント主義的リベラリズムなどとまとめられるが、私に言わせれば、義理と人情を大事にする演歌の風が少し吹き込んでいる。

ロールズは、社会的な善の総量の増加を図ることも重視しているから、功利主義を正面きって敵に回した議論を立てるわけではない。社会的基本財（social primary goods）というものを考える。権利、自由、機会、所得、財産などがそうだ。健康、体力、知能、想像力も基本財であり、こちらの方は自然本性的な基本財に数えられる。基本財であるから、未来に向けた計画を立てる上での合理的な熟慮や、総量の増大に関する合意・意見集約といったものが可能になる。

それらの基本財は、当人がどのような環境にあるのかに左右されるわけで、平等に配分されているわけではないし、思い通りになるものではない。基本財の多寡は人生の成功に大きな影響を及ぼす。基本財に恵まれている方が幸福な人生を送りやすい。そういった格差状況をそのまま放置しておくだけでは、善の分布はまだらなままだ。ロールズは、自由原則と競争原理を保持したまま、その格差を補正し、縮小しようとする。

(1) その際重要なのは、基本財をばらまいて再配分しようとはしていない点だ。格差とは量的な差異ということにとどまるものではない。ロールズは社会的基本財を用いて自分の人生計画が遂行されているときの予期できる満足度が、幸福だと考える。幸福とは、現実の満足ではなく、未来に予期できる満足度だ。

基本財は（注1）デフォールトで与えられたものが外部から付加されない限り増加しないというものではない。資本と同じで自己増殖しなければならぬ運命を担っている。基本財は静止的・固定的量ではない。そして、基本財の中に自尊心（セルフ・リスペ

クト）を入れるところがきわめてロールズ的なところだ。自尊心は、基本財を増やすための鍵である。［　A　］、基本財は原初状態において平等に分配されているわけではないが、自尊心こそ、基本財が自らを増殖させる鍵になる中心的基本財であると考える。

［　B　］、自尊心と並んで、お互い様・互恵性（reciprocity）というものの重視こそ、その核心なのだ。人々が自分の善の構想を追求し、その実現を楽しむためには、自分自身に価値があるという感覚を欠かすことができない。互恵性はこの自尊心、セルフ・リスペクトが成功する可能性を高めるものであり、これもまた最も重要な基本財の一つなのである。

自尊心の対極にあるのが「後悔」なのだ。ロールズの正義論において、後悔や呵責（かしゃく）が盛んに取り上げられる。自分自身には価値がないという感覚、自分は取るに足らない人間だという感情は、ロールズによると、後悔ということだ。自分にとって善であるものが、喪失または欠如している状態への一般的感覚が後悔である。後悔は過去にのみ向けられるのではなく、現在にも向けられる。彼もまたモラル・フィロソフィーの系譜を引き継いでいる。

後悔を重視するのが、徳倫理学だ。これを気づかせてくれた契機となったのが、バーナード・ウィリアムズの「功利主義批判」（一九七三年）という論文だった。そこにインテグリティ（注2）という概念が登場する。ここで示したいのは、後悔ということの重要性と、インテグリティとの関係についてなのだ。後悔と逡巡（しゅんじゅん）ということは、もう少し後になってから触れるかもしれないが、未来との関わりを考える場合に大事になってくる。未来は見えにくいけれど、その見えにくさを合理的な論理性で見通そうとするのは時として危うい道を通ることになる。徳倫理学とは、未来は不透明であり続けるとしても、それを待ち受けるための倫理学だ。そして、(2)待ち受けるための地盤は後悔と涙に濡れた大地なのだ。

トロッコ問題という有名な倫理学的問題がある。制御不可能なトロッコに乗っていて、線路が二つに分かれ、左の線路上には五人、右の線路上には一人いる場合、どっちに進むのが正しいのか、という問題である。功利主義は善の総量計算によって、右を選べと命じ、右の線路を選んだことを正しいと考える。正しいことをしたのだから、その行為は一人の犠牲者が出ても正当なものであった、となる。

さらに別の有名な問題に、ジムとペドロの事例というものがある。ジムは南アメリカのある小さな町の中央広場にいる。二〇人のインディオが壁沿いに立たせられ、その前に制服を着た数人の軍人が銃を構えている。ジムは植物学の研究調査のためその地を訪れていたのだが、道に迷ってその町の広場に偶然たどり着いてしまった。汗まみれのカーキ色のシャツを着た男はペドロといい、政府軍の大尉で、インディオたちは政府に武力で抵抗しているので、これ以上反抗を引き起こさないために見せしめとして全員を銃殺する予定であると教える。ペドロは、ジムに質問し、学識ある研究者であることを知り、尊敬の念から、名誉ある訪問客として遇し、この町を訪れたことへの名誉を与えて、客人の特権としてインディオを一人銃殺する機会を与えるという。その記念で残りのインディオは解放するという。しかし、もしその申し出を遠慮するというのであれば、予定通り、二〇人全員を銃殺する、という。

ペドロの申し出に対して、ジムはどう行動すべきか、という問題である。(3) 功利主義者は、一人のインディオを殺すべきだと答える。［　C　］、どちらかが正しくて、正しい選択肢を選んだ者は後悔の苦しみに陥らないで済むということなのか。これらの問題に対して、正しい答えを探し出して切り抜けようとするのか、人間をつかんで離さない力に倫理というものの本質を見出そうとするのかで大きな違いが出てくるのではないか。

ディレンマだ。二者択一の状況で、いずれを選択しても不都合な結果になる板挟みの状態だ。進むことも退くこともできない。トロッコ問題もこのディレンマの一つのあり方だ。功利主義は、このディレンマを切り抜ける。解決不可能なディレンマを功利主義は切り抜けていく。一方で、功利主義を飲み込めぬままその状況を切り抜けられなくて、後悔し続ける人もいる。

［　X　］

二つに一つしか選べない場合、一方が正しく、一方が間違いという前提そのものが虚偽を含んでいるのではないか、と批判の声を挙げたのが、徳倫理学の提唱者たちだった。トロッコ問題は右（左）を選ぶのが正しかった、それで終わりという問題ではない。それは消すことのできない後悔をもたらす。後悔のみならず、「自責、良心の呵責」などとも様々に語られるが、どちらを選んでも悪を回避できない場合、解決できないディレンマだけが残る。

たしかにそうだ。人生は解決できないディレンマだらけだ。功利主義原理にしたがって、躊躇(ちゅうちょ)なく善悪の量的計算に没頭し最善の選択を選んで振り返らぬまま進んでいくのは、無邪気でしかない。(4)ディレンマは功利主義によっては乗り越えられない。

二つの選択肢があって対立している場合、一方が正しくなければもう一方が正しいはずだと思ってしまう。命題の真理値であれば、真と偽という二つしかなくて、一方でなければその逆が成り立つ。しかし、倫理において、両方が間違っている場合もあるし、両方とも正しい場合がある。なすべきかなさざるべきか、どちらか一方とは限らない。善悪は行為にのみ宿るのではない。行為の善悪は確かにある。しかし、その善悪は最終的には人間に宿るのだ。制御できないトロッコに乗った人は、右を選ぼうと左を選ぼうと、［D］選んだ結果が正しかったと判定されても、後悔の中に沈む。そういう状況に直面すれば潔く自ら命を絶つのが有徳な人だと考える道もある。後悔は、割り切れなさ、やりきれなさとして消しがたく心に残るが、人生は晴朗たる清々(すがすが)しい感情によってのみ構成されるわけではない。黒い情念が澱(おり)のように蓄積した川の縁に佇(たたず)みながら生きなければならないこともある。

後悔はキリスト教思想においてはきわめて重視されてきた。カトリックの告解（告白とも言われる）は、自分が行った罪を告白することだ。告解は、1後悔の念、2告白、3償いの三つの契機からなるという。告白とは言葉で表現することだ。償いとは、なされた不正によって生じた害悪や損害を埋め合わせ、元の均衡状態に戻すことだ。後悔とは何か。後悔とは、行った罪について苦しむことという定義もある。激しい後悔を「痛悔」ともいう。痛悔というのは激しい言葉だ。後悔とは苦しみのためにあるのか。そうではない。倫理の基本的構成要素のはずなのだ。

（山内志朗『わからないまま考える』より）

（注1）デフォールト＝初期状態・初期設定。自分で何もしなくてもあらかじめ設定されている状態のこと。

（注2）インテグリティ＝自分が正しいと思うことについて、誠実であって、強い心を持つこと。

問1 傍線部(1)「その際重要なのは、基本財をばらまいて再配分しようとはしていない点だ」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 14 。

① 再配分によって保有する基本財の量が増すと、かえって未来に対する人生計画が難しくなり、後悔や呵責が自己増殖してしまうから。

② 基本財は外から与えられなければ増えないような固定的な量ではなく自己増殖していくものなので、自己増殖の鍵となる自尊心や互恵性を重視すべきだから。

③ 基本財をばらまくことで格差は縮小されるが、自尊心の自己増殖が妨げられてしまい、結果として幸福には繋がらないから。

④ 格差を是正するためには基本財の配分を均等に近づける必要があるが、基本財の再配分は原理的に不可能であると考えられるから。

問2 空欄 A ～ D に入る語句の組合せとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 15 。

	A	B	C	D
①	確かに	さらに	しかし	そして
②	つまり	けれど	だから	ゆえに
③	加えて	よって	では	しかも
④	もちろん	また	とはいえ	いわば

問3　傍線部(2)「待ち受けるための地盤は後悔と涙に濡れた大地なのだ」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 16 。

① 徳倫理学は、合理性を排してもディレンマからの脱出は可能であると論じるものの、それに失敗する可能性の高い考え方だから。

② 徳倫理学は、現在は選択しきれない問題があっても、後悔や反省を積み重ねていくことで、将来は正しい選択肢を選べるようになると考える立場だから。

③ 徳倫理学は、未来志向の楽観的な思想とは対極にあり、つねに過去への後悔に彩られた悲観的な思想だといえるから。

④ 徳倫理学は、ディレンマを合理的に切り抜けるのではなく、人生を割り切れないままに受け止めて生きることの上に成り立つ思想だから。

問4　傍線部(3)「功利主義者は、一人のインディオを殺すべきだと答える」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 17 。

① 功利主義者は、善悪の判断基準は状況によって変わるものであり、その時点で最善と判断した選択肢を選べば後悔が少なくてすむと考えているから。

② 功利主義者は、二者択一の場面に遭遇した時、行為がもたらす善の総量が多い選択肢を選ぶのが正しい行為であると考えているから。

③ 功利主義者は、そもそも解決不可能なディレンマであるならば、どちらの行為を選んでも善の総量は同じであり、どちらかを選択するしかないと考えているから。

④ 功利主義者は、行為を選択する場合には、後悔がないことに配慮することが重要であり、そのためには行為がもたらす善の総量に従って決断すべきだと考えているから。

問5 空欄 X に入る一文として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 18 。

① そういう人が剣と秤を持って裁きを行える人だ。
② そういう人が最善の道を見定められる人だ。
③ そういう人が自尊心の高い人だ。
④ そういう人が倫理的な人だ。

問6 傍線部(4)「ディレンマは功利主義によっては乗り越えられない」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 19 。

① どちらを選んでも後悔するような状況に直面したとき、功利主義がその後悔を癒すための有効な手段になるとは限らないから。
② 功利主義は、二者択一の判断によって生じる後悔が、罪の償いによって乗り越えられるという宗教的な側面には着目していないから。
③ 量的な計算に基づいて、いずれかの行為を選択したとしても、悪を回避できず後悔が残るから。
④ ディレンマを乗り越える上で必要なのは、人間が基本財として持っている自尊心であるから。

問7 本文の内容と合致するものとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 20 。

① 基本財には、権利、自由、機会などの社会的基本財と、健康、体力、知能といった自然本性的な基本財とがある。
② この文章の著者が初めて後悔とインテグリティの関係を認識したのは、ロールズの『正義論』によってである。
③ ロールズは、格差を是正するためには自由原則と競争原理を排除することが必要だと考えた。
④ 後悔は倫理について考える上で中心的な役割を果たすが、その他の感情は善悪の正しい判断を妨げるものであり、その影響を排除しなければならない。

4 次の各問いの傍線部のカタカナに相当する漢字と同じ漢字を使うものを、それぞれの①～④の中から一つ選べ。解答番号は 21 、 22 、 23 、 24 、 25 。

問1 リン場感あふれる描写

① 掃除をリン番制にする　② 高層ビルがリン立する

③ 九分九リン間違いない　④ リン機応変に対応する

（解答番号は 21 ）

問2 事情をチョウ取する

① 重要な点を強チョウする　② チョウ診器を当てる

③ 景気回復のチョウ候が見られる　④ おみやげをチョウ戴した

（解答番号は 22 ）

問3 メイ柄米を購入する

① 二つの都市がメイ約を結ぶ　② 指導に感メイを受ける

③ 罰則をメイ文化する　④ なんとかメイ脈を保っている

（解答番号は 23 ）

問4 競技場をシッ走する

① 約束をシッ念する　② シッ布を貼る

③ 基礎シッ患を持つ　④ シッ黒の闇に包まれる

（解答番号は 24 ）

問5 ゲン正に審査を行う

① 理想を具ゲン化する　② ゲン粛な空気が漂う

③ 門ゲンまでに帰宅する　④ 会議でゲン案どおり可決される

（解答番号は 25 ）

5 次の各問いの傍線部の読みとして正しいものを、それぞれの①～④の中から一つ選べ。解答番号は 26 、 27 、 28 。

問1 大仰な素振りをする　（解答番号は 26 ）

① たいげい　② おおげさ　③ おおぎょう　④ たいそう

問2 審議会に諮る　（解答番号は 27 ）

① たずね　② ゆだね　③ なげ　④ はか

問3 太陽光線を遮蔽する　（解答番号は 28 ）

① しゅうめん　② しゃへい　③ しょはん　④ しょうへい

6 次の各問いの空欄に入るものとして最も適切なものを、それぞれの①～④の中から一つ選べ。解答番号は 29 、 30 。

問1 古い街並みに（　　）を感じる　（解答番号は 29 ）

① リスクヘッジ　② シャットダウン　③ ノスタルジー　④ シンドローム

問2 「人生は旅である」という表現は一種の（　　）である。　（解答番号は 30 ）

① オノマトペ　② メタファー　③ リフレイン　④ アンソロジー

［出典］

1
坂村　健．　ＤＸとは何か:意識改革からニューノーマルへ．KADOKAWA，2021，p.70-79.

許諾日：2023 年 4 月 28 日　License ID ： G2845-23192300

2
波頭　亮．　文学部の逆襲:人文知が紡ぎ出す人類の「大きな物語」．　筑摩書房，2021，　p.174-180.

許諾日 ： 2023 年 5 月 11 日　License ID ： G2845-23192313

3
山内 志朗．　わからないまま考える．　文藝春秋，　2021，　p. 50-56.

許諾日 ： 2023 年 5 月 8 日　License ID ： G2845-23192314